



Title	近現代日本における水引に関する記憶の系譜
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2021, 77, p. 37-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近現代日本における水引に関する記憶の系譜

矢 島 由 佳

キーワード

水引, 近代化, クラフト, 国民統合, 伝統

Mizuhiki, Modernisation, Craft, National Integration, Tradition

はじめに

1. 贈答文化と水引

2. クラフトデザインと水引

3. 統合のシンボルとしての水引

おわりに

はじめに

紙は世界中で、社会的、文化的価値を創出してきた。日本では和紙として知られる手製の紙が古くから様々な目的で用いられてきた。これまで、日本の紙という素材に関しては、主に和紙について研究されてきたが、水引はデザインされたモノとして研究されてこなかった。水引は、元来、和紙を幅狭く切り、指で縊り、紙縊を作り、そこに糊水をひき、乾かして固めたモノで、江戸時代には一般大衆に普及し、水引師という職業まで確立されていた¹。その起源は定かではないが、遣隋使小野妹子が日本に無事帰ることを願い、紅白の麻布を荷物に結んだことを水引の発祥とする一説がある²。今日、水引は、贈答文化で広く使われ、日本の伝統文化というイメージが伴うことも多い。21世紀に入り、消費対象およびクラフトとして水引の関心も高まりを見せている。この文化的再評価は、水引がデザインの一形態として認識された結果生じたとも考えられる。本研究の目的は、日本の伝統文化と認識される水引に、日本的なモノとしての言説が、どの様に付されたのかを明らかにし、日本の生活文化に根ざしたデザイン史考察の一例を示すことである。水引を考察対象に選んだ理由は、現在、水引を用いた御祝儀袋等の金封は100円ショップ、コンビニエンスストア等、至るところで入手可能で、水引を用いた贈答文化が国民レベルで共有されているためである。考察では、筆者が実施したインタビュー、書籍、政府報告書、検定教科書、博物館アーカイブ、写真、二次資料、筆者の写真記録を分析対象とし、三つの観点から考察する。第一に、贈答文化に着

本稿は、第240回意匠学会研究例会（2020年2月8日近畿大学東大阪キャンパス）での発表に基づく

目し、近代以来 2010 年代まで、商業との兼合いで、水引にどのような儀礼的要素が付与され、その役割が如何に変遷したか考察する。第二に、クラフトデザインに着目し、1880 年代から 21 世紀にかけて、学校やカルチャースクール、消費文化を通じて水引がどのように広がり、クラフトとしての水引の意味が構築されてきたか分析する。第三に、国民統合という概念に着目し、近代化以来、どのように水引が日本を象徴するモノとして用いられてきたか考察する。

1. 贈答文化と水引

包装に関する決まり事は、モノを包むという行為に内包する精神性を表現する言語と人類学者は考えてきた³。人類学者の Harumi Befu は、日本の贈与行為は、複雑な規範に依拠した習慣であり、誰が誰にどのような状況でどのような贈り物がどのように贈られるべきかが考慮されるという。慶事の贈り物に熨斗を添えて贈ることが求められることがその一例であり、熨斗は贈り物の受取人に贈り主が死と無縁であることを示す目的で使われるという⁴。包結研究家の額田巖によると、水引をかけることは、「自分を正しくして、先様を敬い、これに奉仕する」ことを意味し、その心を型で表現するために色と配置と結び方の約束によって目的の意義を現わす。婚礼、凶事、災害見舞等には「二度とないように」との意味を込めて「真結び」にし、両端を結び切りにする。婚礼を除く吉事用一般には「再びあるように」と「蝶結び」にする場合や【図 1】、「真結び」に結んだ上でその端を結ぶ



図 1 蝶結び



図 2 真結び

こともある【図 2】⁵。贈答文化の継承に注目すると、史料は少ないが、江戸時代には、その継承がなされていた。『包結記』（1764 年、宝暦 14）は、伊勢貞丈が子孫のために著した足利将軍時代の有職故実をまとめたもので、「包記」と「結記」から成る。水引を用いた進物用の結びは「包記」に見られるが、「結記」には見当たらない⁶。さらに、礼法に基づく進物包は、雛形を用いて口頭傳承さ



図 3 折形手本, 1697 年

れていたことも史料から窺える【図 3】。このような江戸時代に広まった進物包を礎に、今日も水引を用いた贈答文化はその形態を変えながら存続している。次に、近代以後の贈答文化の継承に着目すると、第二次世界大戦中、出征兵士の武運長久や戦死者のお悔やみのため、金封市場が急速に全国規模で広まり、金封は消費するモノへと移行した。それ以前は、必要な時に金封を作るのが主婦の家政上の務めと位置づけられ、水引と半紙は贈り物用として生活日用品で各家庭に常備されていたという⁷。元来、特定の階層に限定的に使用されてきた水

引を用いた贈答文化が、時代を経て現在の様に国民レベルで広く共有される様になったのは、社会システムに組み込まれて継承された結果といえる。金封を作ることが主婦の務めとなった要因の一つとして、学校教育の果たした役割が考えられる。また、水引を用いた贈答文化が消費対象となった後も、贈答文化が継承されていることを鑑みれば、その文化継承が商業を通じてもなされたと考えられる。以上の理由から、学校教育と商業の果たした役割に着眼し、水引を用いた贈答文化が近代化を経てどの様に構築、継承されてきたかについて考察する。

まず、学校教育の果たした役割について考えたい。1872年（明治5）に日本初の近代的学校制度を定めた教育法令として学制が太政官より発されて以降、様々な教育改革が試みられた⁸。1880年には、小笠原家の当主小笠原清務^{きよかみ}が、女子の礼法教育に注目して、文部省と東京府に礼法教授の必要を建議し、小笠原家は神田小川小学校（裁縫所）等における女礼式の授業の開始を促し、その教授を担当するに至った。この様に、礼法教育は女学校を中心とする学校教育に位置づけられた。礼法教育は、贈答に関連した内容も含み、包み方に関する教義は「折形」の授業として幾つかの女学校教育に取り入れられた⁹。女学校で進物包を学ぶ授業の実施年間にに関する正確な記録は残されていないが、東京書籍株式会社に附設する東書文庫にて所蔵教科書を調査した結果、『新制現代女子礼法全』（1943年、昭和18）に見られる様に、1943年までは礼法として進物に関する記載が教科書にあったことが明らかになった¹⁰。この様に、女学校を中心とした学校教育を通じて、進物に関する知識が国民に広まり、個人が折形に基づく贈答文化の作法に従って生活の中で贈答の機会に進物包の一部として水引を用いる礎が築かれ、国民文化として、水引を用いた贈答文化が継承されたと解釈できる。

学校教育で礼法教育が見られなくなってからは、進物包はデパートメントストアにより国民文化として継承されたと考えられる。それが可能となったのは、水引がその表象形態を変化させる柔軟性を有していたためだと思われる。事実、デパートメントストアにおいて、実際の熨斗および水引の代わりに、それらを図案化し、印字した「熨斗紙・掛け紙」が用いられるようになった。「熨斗紙・掛け紙」が贈り物の象徴として機能するようになった理由は消費主義文化の台頭と関連付けられる。消費社会の発展においてデパートメントストアの果たした役割は大きく、西洋の生活様式を人々に紹介し、上層階級からその新しい生活様式は広がった¹¹。日本で最初のデパートメントストアとして、1905年に東京の日本橋にて三越は「米国のデパートメントストアの一部を実現可^{いたすべく}致候事」という営業方針を掲げてデパートメント宣言を行った¹²。三越は、国家および人々の文化レベルを向上することを目標とし、日本に西洋の商品および販売形態を広めることを宣言として掲げた¹³。1923年の関東大震災までは、一般庶民にとってデパートメントストアはその宣伝やディスプレイスタイルを通じて西洋文

化に親しむものであり、実際に足を運ぶ場所ではなかった。しかし、震災を契機にデパートメントストアは大衆向けのものへと変遷し、三越は広告のキャッチコピーを「今日は三越、明日は帝劇」から「今日は三河屋、明日は三越」に改め、より大衆が親しみやすいイメージを創り出した¹⁴。そして、西洋の生活様式を紹介することを挙げ、百貨店業界を主導していた三越は、近代の日本を体現するために、西洋的な香りを纏い、それまでの呉服店から脱却する新たなイメージを必要とした一方で、一般大衆に受け入れられるためには、呉服店で培った和のイメージも温存させる必要があった¹⁵。つまり、消費主義が台頭する中、折形に基づく贈答文化をデパートメントストアが保持する必要性は、和のイメージを担保することにあったと解することもできる。

明治時代において西洋文化は一部の限られた人たちのものであったが、大正時代、とりわけ1920年代に日本における消費社会は大きく変化した。さらに、日本は第二次世界大戦を経て1950年代から1960年代にかけての経済成長率は一年間で10パーセントを超え、第二次世界大戦以前の経済状況を凌駕した。1956年の経済白書は「もはや戦後ではない」と記し、戦後の経済復興が完了したことを示唆する¹⁶。消費社会の台頭により、人とモノの関係に変化がおきたことは想像に難しくない。高度経済成長に伴い、国民生活は向上し、冠婚葬祭の儀式は豪華になった一方で、自ら水引を結ぶ人が少なくなったため、結納品や金封等、加工度の高い製品の需要およびお歳暮やお中元への装飾としての水引製品への需要も増大した¹⁷。その結果、デパートメントストアでは効率性を上げるために、実際の熨斗や水引を用いる代わりに熨斗と水引を図案化し、印刷した所謂「熨斗紙・掛け紙」を用いる機会が増加していったと推察でき、進物文化における儀礼的シンボルとしての熨斗や水引が、形を変えて継承されていく契機となったと解釈できる。デパートメントストアにおける「熨斗紙・掛け紙」の導入経緯や時期について学術的に論じた文献は見当たらないが、「熨斗紙・掛け紙」の原形、印刷された熨斗として確認できる史料として、日本橋の和紙舗・^{はいばら}榛原が明治時代後半から大正時代の間にデパートストアを含めた顧客向けに作成した印刷された熨斗の見本帳や、木版刷の切熨斗が挙げられる【図4】。切熨斗は、熨斗を切り取り、使用したと考えられる¹⁸。これは、「熨斗紙・掛け紙」が用いられる前段階の史料と考えられ、明治時代後半から大正時代頃には熨斗の簡略化が始まっていたことが窺える。「熨斗紙・掛け紙」の生産高は、戦後の高度経済成長に呼応していたと考えられる。同生産高に関するデータがないが、総務省の包装紙に関するデータ【図5】を参照すると、1948年以降1970年頃まで急激に包装紙の生産高が増加したといえる¹⁹。

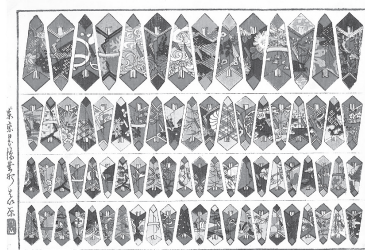


図4 熨斗・切熨斗，榛原所蔵

図表から、包装紙の大量生産は1940年代に始まり、終戦後一時落ち込みを経て、戦後の経済成長と呼応して1950年代から1970年代にかけておきたとわかる。「熨斗紙・掛け紙」の生産高が印刷された包装紙の生産高増加推移に呼応していたとは必ずしも解釈できないが、「熨斗紙・掛け紙」は包装紙に伴って用いられるため、一定の相関性はあると考えられる。

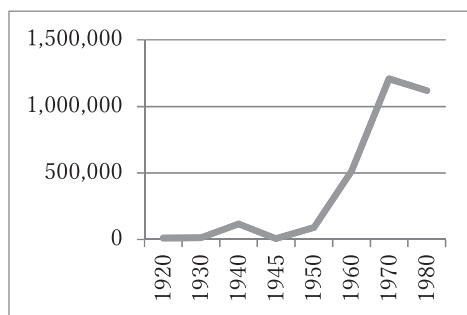


図5 包装紙の生産量 (単位: t・トン)

次に、この様に新たに作り出された「熨斗紙・掛け紙」が人々に享受された理由について考えたい。デザイン史家の柏木博が指摘する様に、1920年代から1930年代に大衆にとってモノの有用性や使用価値の喪失と、モノのイメージ化は同時に進行した。つまり、モノの生産が機械生産に本格的に移行した結果、大量生産以前の社会で生活に結びついていたモノが、実際の生活様式と分断され、モノの使用価値が喪失したと考えられる。この分断された生活様式を基盤に生まれた近代デザインはその始まりから矛盾に満ちたもので、あらゆるデザイン上の差異は、イメージの差異でしかないともいえる²⁰。消費社会について多くの論考を残した哲学者のJean Baudrillardは、「自然界が淘汰された結果、その淘汰が始まったと同時に逆説的にも現実世界もまた消失し始めたといえるのではなかろうか」と述べる。人は、個別の概念を分類し、名前をつける事で、その概念に実体性を見出し、現実と乖離した概念を生み出すという²¹。各人が家庭で実際の熨斗や水引を進物包に用いる実態がなくなった結果、「熨斗紙・掛け紙」という一枚の紙に贈り物の象徴としての新たな概念を付与する余地が生まれた理由もそこにあると考えられる。その結果、大量生産大量消費の潮流に組み込まれながらも、「熨斗紙・掛け紙」という実際の熨斗と水引の代替物を贈答の際に用いることができ、今日まで折形に基づく贈答文化が国家レベルで日本において維持されてきたと解釈できる。

2. クラフトデザインと水引

水引を用いた贈答文化は国民レベルで広がったが、水引は工芸品・クラフトとしても文化的価値を構築してきた。工芸品としての水引は、1915年頃に金沢で津田左右吉が考案、創始した。津田流水引結びは、津田左右吉が伊勢貞丈が著した『包結記』(1764年、宝暦14)を参考に創作したという。同時期に、他でも水引工芸品が作られていた可能性はあるが、記録として確認できていない。1918年頃に津田左右吉が、水引を用いた用途性を伴わない五節句にちなむ鎧具足や内裏雛等の工芸品を結婚式の贈答品としての水引と並行して生産、販売するようになった。それまで、水引は、結納品に使われる実用性を伴う飾りに用いられてきた。

つまり、津田左右吉は、贈与文化に位置付けられた実用品ではなく、鑑賞対象物としての水引を創出したといえ、そこに水引が工芸品として誕生した起源を見出せる。その後、水引工芸品が発展を遂げる過程で、皇室が果たした役割は大きい。1925年に摂政宮殿下（後の昭和天皇）の石川県ご訪問後に津田左右吉の鎧具足人形が殿下に献上されたことを契機に、他の宮家への献上、全国の博覧会等への出展依頼や三越からの発注を受けるに繋がったという²²。

水引工芸品の地位を津田左右吉が確立した後、娘の津田梅の時代には、デザインという概念と対照して水引が次第に評価される様になった。津田左右吉の亡後、1943年に津田梅が水引店を引き継ぎ、結納品飾りと併せて水引工芸品の人形を作り続けた。津田梅の水引工芸品に対する評価として特筆すべきは、1966年頃に工業デザイナーの柳宗理が津田梅の人形を「芸術品らしくなった」と評価したことである。この評価をもって、柳が津田梅の水引工芸品を芸術作品に分類したと断定できないが、水引工芸品を民藝論に位置付けた上で評価する方向性を与えた可能性は高い。事実、日本の民藝をテーマにした雑誌『太陽』（1969）で津田梅の水引工芸品が「加賀水引工芸」として紹介された。そこには、「津田流加賀水引工芸は江戸時代の伊勢貞丈の組紐を基として、大正年間に津田左右吉が創製した。津田梅の家のガラスケースには、具足飾りや雛人形が並んでいる。仕事場では、津田梅が鶴亀や菊梅などの水引飾りを作っていた。津田梅は娘婿とともに加賀百万石の城下町に新しい伝統民藝を育てようとしている。洗練された形と色は、まるで数百年も前からこの町に息づいてきたかのように見えた。」という趣旨が掲載された²³。その後、柳は『竹尾デスクダイアリー No.19 1977』への寄稿文で、津田梅の作った結納飾りの熨斗を次の様に高く評価した。

「写真にあるのは、婚礼の時に使う加賀の熨斗である。普通の熨斗は、きちんと何処も折目をいれなくて畳んであるところがあり、それを水引でぎゅっと締めくくってある。いかにも加賀百万石の熨斗という感じで、豪快で雄大である。（中略）熨斗紙も水引も楮や雁皮等強靱な日本独自の紙があったからこそ産まれたのである。もちろん、襖、屏風、障子、折り紙、紙人形、紙布、風呂紙等種々様々な日本紙の芸術は、どれも日本ならではの文化的特徴を見事に生かしたものであるが、その中でもこの熨斗こそは、最も日本的に凝結し、結晶した珠玉の最たる美しさを放っているとも言えよう²⁴。」

この文章から、柳が津田梅の結納品飾りを民藝品として位置付けたことが窺える。この様に、水引を用いた贈答文化を日本的なモノとして位置付ける態度は、1970年代以降20か国以上の美術館に巡回した展覧会 *How to wrap five more eggs: traditional Japanese packaging* やロンドンのVictoria and Albert Museumで開催の展覧会 *Japan Style* (1980) にも見られる。How

to wrap five more eggs: traditional Japanese packaging と題された自然素材を用いた日本の「包む文化」に焦点を当てた展覧会を監修したグラフィックデザイナーの岡秀行^{ひでゆき}は、包むという行為に浄化という要素が伴うため、包装されたモノとされていないモノの価値が異なると人々は理解する。そしてこの日本の精神性は、目的別に定義された包装にまつわる決まり事として現れていると説明する²⁵。この神聖化の考えは、日本語で「神・Deity」と「紙・Paper」が同音であるという、聴覚的解釈に起因すると解されてきた²⁶。この様な「神と紙の関係性」に関する言説は、今日まで商業においてマーケティング手法の一部として自覚的にも無自覚的にも用いられ、水引の神聖なイメージを担保するために、「創られた伝統」あるいは「想像上の伝統」という概念が水引の表象表現に伴ってきた。例えば、市場に出回っている水引は、ほとんど工業製品としての紙を原料に作られたモノであるにも関わらず、あたかも和紙を原料に水引が手作りで製作されたという神話が強調されることは珍しくない。

紙が神道との関連で神聖性を帯びた日本的なモノと理解される一方で、生産の実態に着目すれば、水引を用いた贈答文化で最も馴染み深いと考えられる金封は、海外労働力や機械に頼って生産されている。現在、生産高ベースで国内最大の水引生産地である長野県飯田市の飯田市水引協同組合が平成23年度に実施した調査によれば、同組合員の主要生産品目は、金封39%、結納品14%、工芸品1%、その他46%であった²⁷。国内最大手の金封の供給元である飯田市の木下水引株式会社は、コンビニエンスストア等で購入可能な金封に用いる水引の9割以上を中国で生産する²⁸。同社は、1988年に水引を結ぶ事業拠点を中国に移し、完成品を日本で出荷することで、金封価格を低く抑えている。そして、金封の製作における紙を折る工程ではドイツ製の機械を用いる²⁹。水引の生産に海外の労働力や外国製の機械を用いているという、この事実は、無自覚的に水引を日本的なモノと認識する者に、モノに付随する真のナショナル・アイデンティティとは何かと問うている。さらに、*Japan Style* は、日本の伝統文化が如何に日本のデザインに影響を与えたか、伝統的文化を保持しながら、西洋的な生活様式と融合し、デザインプラクティスを発展させてきたかという趣旨で企画されたと考えられる。展示には、倉又史郎や柳宗理のデザインしたモノ、藁でできた雨合羽、竹細工、桶、鉄瓶、漆器等の民藝品や工芸品と併せて水引を用いた結納飾りも含まれた³⁰。この展示内容から、水引がデザインという概念と対照されながら、日本的なモノと解釈されていたことが窺える。

津田左右吉の創始した水引工芸品は、水引がデザインという概念と併せて評価される礎を築いただけでなく、1970年代以降カルチャースクール等で多様なオブジェが作られる源泉にもなった。JAL 国際線・国内線の機内誌『Skyward』（2013）は、津田左右吉が水引を平面に用いるだけでなく、立体的な工芸品作りに用いたことで、水引の使い方の幅を広げ、水引は

伝統をベースに進化してきたと紹介する³¹。1975年に、水引に特化したカルチャースクールとして、東京水引芸術学院が設立された³²。同校は、1970年代から1980年代にかけて民間教養講座として所謂カルチャーセンターが相次いで開講された潮流の中、開講された³³。同学院で生徒は干支の人形等季節のイベントに合わせた立体工芸品を水引で作り、そこには、神道に起因する規範的要素はほぼ見られない。その一方、学院のウェブサイトでは、前述の『包結記』に言及し水引の起源や歴史等について述べることから、学院で扱う水引工芸品は日本の「伝統」に因るという印象を与えたいという意図が読み取れる。カルチャースクールで求められる水引講座内容も時代とともに変化し、同学院では、2010年頃から水引工芸のクラスではなく、主に30代から40代の女性を中心に『包結記』に基づく折形を習うクラスの需要が高くなったという。そこでは、『包結記』に基づく折形のテキストと学院長の田村京淑氏が所有する折形の雛形をもとに水引結びが学べる³⁴。このような需要の背景には、個人主義が台頭する社会で、特別な知識を得て他者との差別化を図ることや、他者と時間や空間を共有して一体感を感じるという自己確立を図る場が必要とされている状況があると考えられる³⁵。

さらに、水引がアクセサリー、インテリア素材等の実用品として用いられる事例も見られる様に、水引工芸品・クラフトの概念も時代に応じて変化し続けている。水引で作ったアクセサリー、箸置き、正月飾り、鞆、置物、建材等を扱う金沢の自遊花人は水引の新たな使用領域を開拓する先駆的な企業の一つである³⁶。とりわけ、インテリア素材として水引を用いている点は注目に値する。インテリア用途に用いる「飾り糸巻き水引」は、紙芯に糸を巻きつけて、耐水加工が施された水引である³⁷。同社のホームページから、旅館やホテルでパーティションやパネルに用いていることがわかる³⁸。紙だけでなく、糸と組み合わせた素材も「水引」と呼称することから、水引は、素材に拠って定義できない概念的なモノに変容してきたといえる。仮に芯にワイヤーを使ったモノに糸を巻いた素材は水引と呼べるのか、芯が紙であるから水引なのか等、何をもって水引と定義するかという議論が想起される。

3. 統合のシンボルとしての水引

水引は、贈答文化や工芸・クラフトにおいて時代の変化に呼応して用いられてきた一方で、国際親善の場では、国民統合や日本の象徴としても用いられてきた。以下では国民統合のためのシンボルとして水引が用いられた理由を事例に基づいて理念とデザインに着目して考察する。大会誘致は失敗に終わったが、2016年夏季オリンピック大会誘致キャンペーンとして、2008年の東京マラソンでは「水引制作キット」のブックマークが配布された他、2008年10月にはJALの国内線で水引を用いたデザインを伴った機体が運行された。さらに、1998年の長野冬季オリンピックが開催された際には、パラリンピック表彰式で、結びの心を表す象

徴物として、水引で編んだ月桂樹の葉でできた冠がメダリストに贈られた。

まず、これらの事例を元に統合のシンボルとしての水引について考えたい。2016年のオリンピック招致のエンブレムは、GKデザイングループによりデザインされた。2007年7月に招致エンブレムとして、5大陸を表象する五色のオリンピックカラーを用いた五輪マークの上に同じく五色のオリンピックカラーを用いたモチーフ化された水引が配置されたエンブレムが発表された【図6】。その後、2008年6月にIOC理事会による立候補都市決定を受け、オリンピック・シンボルを伴う招致エンブレムへリニューアルされた【図7】³⁹。



図6 オリンピックエンブレム



図7 オリンピックエンブレム

デザインとして注目すべきは、水引がモチーフ化される過程で三次元の立体物としての水引が二次元のグラフィックデザインに変容して表現されている点である。大会コンセプトに関して、GKデザイングループ会長の栄久庵憲司は、大陸、国、人、日本と世界、子どもと未来等、あらゆるものを結びつけ、一つにしたいという意味と願いを込めてエンブレムのコンセプト「UNITE」を決めたという。そして、水引をモチーフに起用した理由として、国造りの神話、小野妹子により中国から水引の原形がもたらされたこと、慶弔時に水引が使われてきたことに言及し、日本人の中にある「結び」の心を水引が象徴的に現わしていることを挙げた⁴⁰。つまり、エンブレムを見る者がそこから神話に起因する歴史を想起することや、民族的背景の異なる多様な人々の間に紐帯を醸成するイメージを創り出すことを想定してエンブレムに水引モチーフが採用されたと解釈できる。また、日本の構成人口における外国籍の人口比率が上昇している状況も同コンセプトを必要とした要因と考えられる⁴¹。一方、国や民族ルーツの異なる人々を一つに束ね、多様性を認めるための広告手法は、ベネトン、コカ・コーラ等にも見られ、この様な進歩的なグローバル展開をした広告は、消費主義社会文化の台頭の結果生じたといえる⁴²。

オリンピックという国際親善の場で、様々な人やものを束ねることを目的に水引が神話を根拠に用いられた背景には、伝統という概念があると考えられる。歴史家、Eric Hobsbawm は伝統の起源について、所謂伝統といわれているものの多くは最近生み出されたものであることが多いと述べる。あるモノを伝統的なモノと分類できるか否かは、それがどの程度それまで存続してきたかというよりも、そのモノの見た目および、どの社会階層がそれを使っているかによって決まるという⁴³。政治学者の Benedict Anderson は、国民国家という概念は近代が生んだ産物であり、それは資本主義経済の誕生、印刷業界の発展を礎に形成されたと主張

する⁴⁴。国家形成に重要となるのは、運動および思想として国家主義が存在しているか、集合的な存在としてその国の特有性があるか否かということである。「茶道にみる日本のナショナリズム」に詳しい Kristin Surak は、政治的には、民族固有の文化が領土内でそこに住む人々に共有されているかに鑑みて、国民国家の正当性が判断され、あらゆる習慣、モノ、行事、象徴物が確固たる文化を確立するという。一方で、国中で実践されていると認識可能な事象や運動を見いだすことと関係するという意味で、国家を定義することは極めて言説的な行為でもあるという。茶の湯の様な身体表現を伴う行為についてはおしなべて共有されるということは難しいが、国際親善の場で茶の湯で海外の貴人をもてなすことに見られる様に、茶の湯文化を日本の象徴と捉え、国を代表する文化・慣習として認識されることもある。つまり、ある国の特有の文化を全国民が同程度に嗜むということが事実上不可能であると指摘する。Surak が主張する様に、国家形成に大きく寄与する様な文化は、公共の場や文化鑑賞の場、日常生活での些細な表現を通じて、その文化を体得することが可能な文化を示す⁴⁵。さらには Hobsbawm が示したように、発案された国家的伝統は、上流階級が享受した後、一般大衆にも広がるものである⁴⁶。以上のナショナリズムに関する論を踏まえると、水引に内在する「結び」という概念が広く国民レベルで共有されていた土壌があったために、一国家の大会コンセプトとして水引が日本の表象物として採用されたと考えることができる。

次に、オリンピック誘致エンブレムにふさわしいデザインとして水引が選ばれた理由をオリンピック誘致キャンペーンの性質と併せて検討する。オリンピック誘致活動のためのエンブレムをデザインは、そのデザインが多様な目的で様々な媒体に使用されるという意味で、GK デザイングループにとってはデザイン手腕を明示する機会でもあったといえる。その一例として、2008 年 10 月 2 日からオリンピック誘致のキャンペーンの一環として運行された JAL の国内線の機体に展開された水引を用いたデザインが挙げ

られる【図 8】。機体の大部分を占める、オリンピックカラーを用いた 5 本の幅の異なるラインのデザインに着目し、エンブレムのデザインと比較すると、水引の結び目の要素は省かれ、線で表現されたデザインに変容している。つまり、結ばれた状態



図 8 JAL 特別塗装機

では三次元物である水引が、結びを解いた二次元の線に還元されて表現されている。水引デザインの展開は、2008 年の東京マラソンで「水引制作キット」として配布されたブックマークにも見られる。「水引制作キット」には、ブックマークを作る材料として、実際の水引と印刷された水引モチーフのエンブレムの紙が水引の歴史やブックマークの作り方の指示書が同封されている【図 9】。「水引制作キット」を手にした人が、水



図 9 水引制作キット

引の歴史を知り、水引を結ぶ行為を通して水引と親しめる様にデザインされ、飯田水引協同組合の協力のもと、生産された。オリンピックの舞台で水引は度々用いられ、1998年の長野冬季オリンピック開催時には、パラリンピックの表彰式で「結び」の心を象徴する「水引で編んだ月桂樹の葉でできた冠」がメダリスト全員に贈られた。また、オリンピックおよびパラリンピック参加の選手、役員、海外報



図10 左) 月桂樹冠、右) 選手・役員・海外報道関係者に配布記念品

道関係者には、水引細工の記念品が配られた【図10】。これらの準備も飯田水引協同組合の主導により実現した⁴⁷。以上のことから、様々な素材にエンブレムが用いられる汎用性を考慮すると、「結び」のイメージを担保しながら、実際には線で素材を還元して表現できる性質が水引に内在することから、水引がエンブレムのモチーフに選ばれたと解釈できる。

おわりに

水引を用いた贈答文化は、その形態を変化させながら今日まで継承されてきた。それが可能となったのは、贈答文化の実用価値が形式を変えて継承されてきたためだといえる。消費主義文化が台頭した結果、家庭や学校教育の代わりにデパートメントストアが和紙、熨斗、水引を用いた贈答文化の保全を担う様になった。そこでは、贈答物に掛け紙としての和紙に熨斗をつけ、水引をその上に結ぶよりも、熨斗や水引が印刷された熨斗紙を贈答品にかけるといふ、効率性を重視した新たな贈答形式が導入された。別の見方をすれば、この形式化された贈答形態が、その源泉、つまり、形式化される前の贈答形態を知る手がかりにもなるという意味で、水引を用いた贈答文化がデパートメントストアにより保全されたとも解釈できる。水引を用いた贈答文化は、今日の多くの日本人の生活様式とはかけ離れたものであるにも関わらず、伝統的日本文化であるという言説が成立し、好意的に受け止められる理由は、伝統が明確に定義できない概念であることに起因する。一方、クラフト・工芸品としての水引の文化的価値は、デザインという概念と対照されながら、20世紀以降に確立された。その価値は、折形に根ざす規範性を有した水引結びと制約のない自由な水引結びとの間を往来しながら、時代の要求に応じて創出されてきた。水引の汎用性は高まり続け、インテリアや建築素材としても現在用いられている。それは、水引がその原料として元来用いられた紙素材に基づいて定義できない概念的なモノに変容したために可能となった。換言すれば、水引は、紙縊でできている必要性はなく、紙縊を用いた際の結びと同形状を表現できれば、その結びに用いる素材を「水引」と主張できる論理がそこにある。また、素材に拠って定義できない概念的柔軟性が水引に内在するために、水引はクラフト・工芸分野で今後も変化し続けると予

見できる。さらに、国民統合のために、水引は、日本人の心を表象する象徴物として国際親善の場でも用いられてきた。この主張は、水引に内在する「結び」という概念が国民レベルで共有され、好意的に支持されている土壌があることを前提に成立するが、ある国における特有の文化を全国民が同程度に嗜むことが事実上不可能であるため、根本的には成立し得ない。以上のことから、水引の文化的価値は、伝統や国民国家という定義することが困難な概念に基づいて創出されてきたと結論付けられる。そして、水引に付与されたイメージが、商業と結びつき、意図的に集团的記憶として形成、共有されてきたことも本研究は明らかにした。

註

- 1 飯田水引協同組合『飯田水引産業史』（飯田水引協同組合、2003）、pp.38-39、
『人倫訓蒙図彙 4』（だるまや書店、1917）[『人倫訓蒙図彙』（1690）]、
「雍州府志 巻七」『続々群書類従第八』（続群書類従完成会、1978）、pp.190-217 [黒川道祐『雍州府志 巻七』（1686）]、
額田巖『結び——もの与人間の文化史 6』（法政大学出版局、1972）、p.103.
- 2 飯田水引協同組合『飯田水引産業史』、p.18.
- 3 Joy Hendry, *Wrapping culture: politeness, presentation and power in Japan and other societies* (Oxford: Clarendon Press, 1993), p.15,
Katherine Rupp, *Gift-giving in Japan: cash, connections, cosmologies* (Stanford, Calif: Stanford University Press, 2003), p.99.
- 4 Harumi Befu, *Gift-Giving in a Modernizing Japan*, Monumenta Nipponica, Vol. 23, No. 3/4 (1968), p.445-446,
Joy Hendry, *Wrapping culture: politeness, presentation and power in Japan and other societies*, p.15.
- 5 額田巖『結びの文化：日本人の知恵と心』（東洋経済新報社、1983）、pp.30-32.
- 6 荒木真喜雄『復刻伊勢貞丈「包結記」I 翻刻・現代語訳集』（淡交社、2007）、[伊勢貞丈『包結記』（静幽堂、1804）].
- 7 飯田水引協同組合『飯田水引産業史』、p.63.
- 8 David Wittner, *Technology and the culture of progress in Meiji Japan* (London; New York: Routledge, 2008), p.29.
- 9 筑波大学『明治時代に礼法はいかにつくられたか』
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/reihou/H24zuroku.pdf> [2019 年 12 月 14 日].
- 10 甫守謹吾『新制現代女子礼法 全』（金港堂書籍、1943）.
- 11 Elise Tipton, 'The department store: producing modernity in interwar in Japan', in *Rethinking Japanese modernism*, ed. by Roy Starrs (Leiden: Brill, 2012), pp.432-444.
- 12 三越本社コーポレートコミュニケーション部資料編纂担当 編『株式会社三越 100 年の記録：デパートメントストア宣言から 100 年：1904-2004』（三越、2005）、p.64.
- 13 Elise Tipton, 'The department store: producing modernity in interwar in Japan', in *Rethinking Japanese modernism*, pp.432-444.
- 14 *Ibid.*, pp.434-445.
- 15 神野由紀『趣味の誕生：百貨店がつくったテイスト』（勁草書房、1994）、p.59.

- 16 山本武利『百貨店の文化史：日本の消費革命』西沢保 編『(世界思想社, 1999), pp.5-6.
- 17 飯田水引協同組合『飯田水引産業史』, p.105.
- 18『千代紙いろいろ小間紙の世界へのし・短冊など：日本橋老舗のコレクションから：明治・大正・昭和初期』大柳久栄 監修（東日本鉄道文化財団, 2007), p.26.
- 19 総務省統計局 監修『日本長期統計総覧 第3巻』（日本統計協会, 2006), p.366, p.440.
- 20 柏木博『日用品のデザイン思想』（晶文社, 1984), pp.115-119.
- 21 Jean Baudrillard, *Why hasn't everything already disappeared?* (London; New York; Calcutta: Seagull Books, 2009), pp.9-11.
- 22 本岡三郎『加賀の水引人形師』（北国出版社, 1970), p.4, pp.19-22, pp.42-43.
- 23 同上, pp.6-7, pp.11-13,
「伝統を創る ― 加賀水引工芸」『太陽 THE SUN 1969年8月号 no.74 特集：日本の民芸 オランダ風船旅行』（平凡社, 1969), pp.36-39.
- 24 柳宗理「紙の美・加賀の髪斗」『竹尾デスクダイアリー No.19 1977』（株式会社竹尾, 1977).
- 25 Hideyuki Oka, *How to wrap five more eggs: traditional Japanese packaging*, p.12.
- 26 額田巖『包み（ものと人間の文化史 20）』（法政大学出版社, 1977), p.139,
松浦彦操『神典形象』大宮司朗 編（八幡書店, 2002), pp.55-59.
- 27 筆者が飯田市水引組合で2014年7月2日に閲覧した「平成24年度長野県産地概況調査 調査票」による。
- 28 筆者が2014年7月2日に飯田市水引組合を訪問した際のインタビュー内容に基づく。
- 29 服部比呂美「水引業の変遷」『飯田・上飯田の民俗1 飯田市地域史研究事業民俗調査報告書6』（飯田市美術博物館・柳田國男記念伊那民俗学研究所, 2013), pp.148-149.
- 30 Mitsukuni Yoshida, *Japan style* (Tokyo: Kodansha International in collaboration with The Japan Foundation and the Victoria and Albert Museum, 1980).
- 31 本間公子「寿ぎのかたち水引の美」『Skyward』（JAL, 2013年12月）.
- 32 東京水引芸術学院
http://mizuhikimusubi.web.fc2.com/about_mizuhiki/index.htm [2020年5月31日].
2014年7月10日に田村京淑氏を尋ね、筆者が観察した内容及びインタビューに基づく。
- 33 歌川光一「カルチャーセンター研究史：生涯学習・社会教育研究における趣味講座の位置づけをめぐる試論的考察」『生涯学習・社会教育学研究 33』（東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室紀要編集委員会, 2009), pp.67-77
file:///Users/tomatolover%201/Downloads/life33_7.pdf [2020年6月7日],
NHK文化センター『会社沿革』
<https://www.nhk-cul.co.jp/company/company-2.html> [2020年6月7日],
読売・日本テレビ文化センター『会社案内』
<https://www.ync.ne.jp/company.php> [2020年6月7日].
- 34 東京水引芸術学院
http://mizuhikimusubi.web.fc2.com/about_mizuhiki/index.htm, [2020年5月31日].
2014年7月10日に田村京淑氏に筆者が実施したインタビューに基づく。折形の授業への需要の高まりは、折型デザイン研究所にも見られる。（2014年7月9日に筆者が山口信博氏に実施したインタビューに基づく。）
- 35 Glenn Adamson, Section Introduction: Section 6 Craft in action: Life, Art, Design in *The Craft*

- Reader, ed. by Glenn Adamson (Oxford: Berg, 2010), pp.457-463 (pp.457-459),
Richard Sennett, 'Disturbing Memories', in *Memory*, pp.10-26 (p.23).
- 36 自遊花人 <https://www.jiyukajin.net/#products> [2020 年 5 月 30 日].
- 37 『金沢の創作水引ギャラリーで新作展 ― 金沢伝統工芸に「新たな可能性」』(金沢経済新聞, 2013 年 4 月 10 日) <https://kanazawa.keizai.biz/headline/1994/> [2020 年 5 月 30 日].
- 38 自遊花人 <https://www.jiyukajin.net/#products> [2020 年 5 月 30 日].
- 39 「東京オリンピック招致エンブレム (2016 招致) 特定非営利活動法人東京オリンピック招致委員会」GK Graphics
<https://www.gk-graphics.jp/archives/works/works-168> [2020 年 6 月 10 日].
- 40 公益財団法人日本オリンピック委員会『今の時代だからこそ求められる「結び」のころ』OLYMPIAN 2009 (財団法人オリンピック委員会, 2009 年 7 月 17 日), p.17,
<http://www.joc.or.jp/column/sportsandart/200802.html> [2014 年 8 月 14 日].
- 41 総務省『報道資料 人口推計平成 28 年 (10 月 1 日現在)』(2017 年 4 月 14 日)
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2016np/pdf/2016np.pdf> [2020 年 6 月 13 日].
- 42 Penny Sparke, *An introduction to design and culture: 1900 to the present* (New York: Routledge, 2004), pp.211-213.
- 43 Eric Hobsbawm, *The invention of tradition*, ed. by Eric Hobsbawm and Terence Ranger (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), p.1.
- 44 Benedict Anderson, *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism* (London: New York: Verso, 2006).
- 45 Kristin Surak, *Making Tea, Making Japan: Cultural Nationalism in Practice* (Stanford: Stanford University Press, 2013), pp.3-7.
- 46 Eric Hobsbawm, *The invention of tradition*, ed. by Eric Hobsbawm and Terence Ranger, pp.300-306.
- 47 飯田水引協同組合『飯田水引産業史』, p30.

【図版出典】

- 図 1, 2: 日本橋の株式会社榛原にて筆者が撮影 [2014 年 7 月 11 日].
- 図 3: Model of Paper Folding (Origata Tehon) (1697), The Metropolitan Museum of Art
<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/78428> [2020 年 8 月 16 日].
- 図 4: 『千代紙いろいろ小間紙の世界へのし・短冊など: 日本橋老舗のコレクションから: 明治・大正・昭和初期』大柳久栄 監修 (東日本鉄道文化財団, 2007), p.26.
- 図 5: 総務省統計局 監修『日本長期統計総覧 第 3 巻』(日本統計協会, 2006), p.366, p.440 をもとに筆者が作成.
- 図 6, 7: 「東京オリンピック招致エンブレム (2016 招致) 特定非営利活動法人東京オリンピック招致委員会」GK Graphics
<https://www.gk-graphics.jp/archives/works/works-168> [2020 年 6 月 10 日].
- 図 8: JAL GROUP NEWSPRESS (2008 年 10 月 2 日)
<http://press.jal.co.jp/ja/release/200810/000670.html> [2020 年 5 月 30 日].
- 図 9: 飯田市水引組合にて筆者が撮影 [2014 年 7 月 2 日].
- 図 10: 長野県飯田市の「ふるさと水引工芸館」にて筆者が撮影 [2014 年 7 月 2 日].

Tracing the Memory of *Mizuhiki* in Modern and Contemporary Japan

YAJIMA, Yoshika

Flexible, easily folded, and even coiled to make thread, paper has long had a role in supporting and expressing social and cultural values in many parts of the world. In Japan, people have valued and used handmade paper, known as *Washi*, in various ways since ancient times. It figures in many aspects of daily life including religious practices. Whilst many scholars have discussed two-dimensional paper in the context of Japan, few have looked at paper as a three-dimensional design object, in particular the paper cord known as *Mizuhiki*. *Mizuhiki* is a type of ribbon-shaped knot used in connection with ritual gift giving since ancient times. After a long period of cultural disinterest, its manufacture and use has been revived in commerce and craft practice in the twenty first-century. This revaluation has come about through its recognition as a form of design. This paper will focus on *Mizuhiki* with an aim of revealing the embedded power of paper cord *Mizuhiki*, focusing on its changing cultural value. The primary question driving this paper is: what developments have made it possible for *Mizuhiki* to act as a cultural representative of Japan and shifted its cultural status in response to changing society? ¹

¹ This abbreviated version paper partially summarises my Master's dissertation, entitled *Mizuhiki: a ritual paper thread, knotting between commerce and craft in the 21st century*, and I would like to especially thank both Dr. Christine Guth, my Master course supervisor, and Dr. Keisuke Takayasu, my ongoing Doctoral course supervisor for their invaluable comments and encouragement throughout this whole process.